

平成 20 年 11 月 20 日 横須賀市 元下水道部長
現 横須賀市都市施設公社管理部長 柳田 隆

苦しみと喜びの交差点

はじめに

下水道に関連したプロジェクトの思い出・・・という、まだまだ私が仕事への意欲と共に体力も今より旺盛な時代に、上記表題の寄稿を思い出します。平成 5 年、神奈川県内の自治体全てが下水道事業に着手したことを祝し、出版した県記念誌に寄稿したのが「苦しみと喜びの交差点」というプロジェクト・エッセイでした。一昨年、土木みどり部長を最後に、横須賀市を退任した今、このプロジェクトは改めて私の生きる道しるべであったと、思いを新たに当時の投稿文に修正と加筆をして紹介するものであります。

横須賀市が、本格的に下水道事業を実施したのは昭和 38 年、正確に着手元年はというと、昭和 19 年創設というべきでしょう。しかし、戦後の混乱また、物資の不足などで工事も一時中断を余儀なくされた時代のようなのです。隔世の感こそあるものの、当時の管渠施設は平成の今も立派にその役割を果たしているのですから、永年勤続 64 年の表彰状を送ることに・・・ということにはなりません、断面、勾配等々とりあえず機能を発揮しているのですから驚きです。

さて、本市の下水道整備の現状ですが、平成 19 年度末における汚水整備の人口普及率は 97.4%、雨水の整備率いわゆる都市浸水対策達成率は 61.8%となっております。雨水整備では私自身、今でも忘れることのできない深い思い出があります。

昭和 49 年 7 月 8 日、横須賀市にとって時間最大降雨量が約 70 ミリという未曾有の集中豪雨により、災害救助法の適用を受けるほどの大きな浸水災害に見舞われ、とりわけ市の南東にある久里浜地区は 2 級河川「平作川」の氾濫により、市街地の浸水面積の約 25 パーセントに当たる約 1500 ヘクタールが浸水したのであります。

私たちが七夕台風と呼んでいるこの年の台風 8 号の直撃は、水害だけでなく、がけ地の多い横須賀の弱点をも容赦なく攻め、住宅地裏のがけ崩れが多数発生し、13 名の尊い命が失われたのであります。

また、この久里浜地区は翌年の昭和 50 年 7 月 4 日に再び降雨災害に見舞われ、昭和 51 年 12 月、被害を受けた地元住民から水害訴訟の提起をされました。

20 年を経過して最高裁の判決により「異常な自然現象であり都市施設として人為的防除の限界を超える」として行政側の勝訴で解決したのであります。

神奈川県が管理する 2 級河川、平作川整備については、激甚災害として指定されたことも

あり、下水道事業未着手の久里浜地区は、水洗化促進の汚水よりも浸水対策の雨水施設の整備が急務である、との意見が地元そして市議会等からも出されました。そこで市では下水道計画の見直しを行い、平作川とは別ルートで直接久里浜港へ雨水を流下させる、いわゆる「久里浜雨水バイパス幹線」の計画立案に着手、初年度に私も参画させていただきました。この計画が、ほかの地区の汚水整備の進捗に大きな影響を及ぼしたことは言うまでもありません。

この雨水バイパスは施設の大きさもさることながら、事業費も膨大で当時としてはかつてない規模となり、国や県また議会等に対して、事業変更認可から事業決定の認承、そして昭和 54 年着手まで、関係職員は一丸となって努力したものでした。

私は、平成 52 年 4 月に総務部契約課の検査員に任命されるまでの 2 年間、平作川と同様、浸水被害を受けた久比里地区にあるもう 1 つの小規模河川である全長約 900m の吉井川の改修工事の設計を担当していたのですが、昭和 54 年、55 年にこの工事の竣工検査を自身で担当するという名誉？な偶然もありました。

さて、再びこの久里浜地区の浸水解消の事業に携わったのは、下水道部門に所属されて 5 年目の昭和 62 年。そのころ私は、本市の北地区の下水道整備を担当する係長でしたが、この雨水バイパス完成を昭和 64 年度末（平成元年度末）までに達成させる特命を受けたからでありました。このころ全長約 3700m のバイパスの建設は、約 3200m が完成しており未整備分は約 500m。これが難題中の難題であったわけです。というのは、建設用地のほとんどは拡幅が必要であり、用地買収及び家屋移転そして家屋と宅盤の嵩上げ工事、一部には鉄道架橋下横断のため橋脚移設を伴うことなど、これらの「交渉から賠償」そして「施設の建設」まですべての業務を担当し、解決しなければならないことになりました。なぜ私が？…なんていう自問の前に、「望まれる人となれ！」と言い続けてきた言葉と、持ち前の負けず嫌いと好奇心旺盛な性格に後押しされ、納得して 3 年の期限に挑戦することにしました。

本格的にこの業務に携わったのは、私のほか係員 1 名。分からないことが分からない？交渉スケジュール表（ロードマップ）を作成してビックリ、「これは無理かも…」いやいや、もう後ろは向けない！ さあ、課の予算管理、11 名の係の監督指揮をしながら五里霧中の日々の始まりです。建設用地確保のため交渉した対象者は 26 人（企業）、毎日深夜に及ぶ作業に加え、休日返上でなりふりかまわず没頭したものでした。ただ、つらかったことは住民の方（特にお年寄り）に、長年住み慣れた場所を移転していただく交渉で、理解と協力の二文字だけでは割り切れないものが常に付きまとっていたことでした。

また当時、下水道部では用地買収や交渉の業務は、特段の教育も受けず税対策等の専門

知識もない設計施工を担当する我々技術職員が行っておりました。そんなことから、設計者は用地買収等を伴う現場の担当にならないことを願いながらスケジュール会議等に臨んだものでした。・・「なぜ、下水道部には用地課などの専門部署を設置しないのだろう？」。用地の買収、移転の業務は、設計施工の業務と別組織で同時進行していくことが効率的と思っていたので、こんな疑問と不安を持ちながら交渉を進めていたのです。

ところが、交渉していく段階で気が付いたことなのですが、条件提示と合意の原点は、下水道施設の大きさ、施工方法、事業の効果など技術的な説明（説得）があつての納得であるということでありました。設計、施工を担当する技術職員が直接交渉することで、対象者の要求に対して物理的、技術的なものについて分かりやすく、また、変更判断も柔軟に即応でき結果的に時間短縮の効果が図られた、と思うようになってきたのです。

特命を受けてから1年が経過、雨水バイパス完成期限まであと2年。用地買収と家屋移転の交渉は、対象者すべての方との補償条件の段階まで進んでいました。しかし、工事完成までという、今すぐ着工しなければとても目標達成は難しい状況にあったので、施工着手の交渉も併せて開始したのです。それは、居住のままの着手というなんとも無茶なお願いに対する同意をいただく、ということでありました。

移転が完了しなければ雨水バイパス建設には着手できない、これが常識的な考えでしょう。しかし、無情とか強引とか言われても、雨水バイパスの完成後の地域の方々が、大雨からの恐怖もなくなり、安心して住める街に憩えるんだ！・・この信念が途中挫折も逃避もさせない強い応援団となって、根気良く何度も何度も対象者の方々と膝詰め交渉を行った結果、用地買収、移転の基本的な同意、そして、解体前の家屋一部の解体、土地の先行使用の承諾を得たのは、昭和63年の秋でした。

もう対象者の方はあきれていましたが、「あの時の大雨災害からこの地区を守るために、この雨水バイパスの必要性、国県の議会と行政の援助、市と住民の熱い想いのある今を逃してはならない。1日も早い完成を・・」私の言葉を信じていただき、一丸となった地域を思いやる方々の心によって、平成元年1月、最後の区間の着工が誘導されていったのです。

そして平成2年の3月、久里浜地区念願のバイパスは目標どおり完成したのです。着工から実に11年の歳月と、総事業費約51億円を費やした大事業でありました。

完成を祝う通水式は、雨水バイパス幹線沿いの公共用地に大きなテント2針を設置し、地元選出の国県議会議員、全市議会議員、用買・移転対象者、地元住民、そして報道関係者から施工業者等関係者の約200人をお招きし、工事の全てが完了した年の初秋に挙行されました。式典のプロデュース兼裏方の私と担当者は、来場された用地買収・移転対象者の方々を会場から少し離れたところでお迎えをさせていただいたのですが、皆さん私を見

つけると駆け寄ってお祝いや安心へのお礼の言葉や、握手の手を差し伸べてくる方までいて、3年間の無我夢中への最高のご褒美でした。

式典は、ご来賓の方々のお祝いと激励の言葉に続き、いよいよ通水式最大の見せ場、電光大掲示板の雨水バイパス流下スイッチのボタンを押す時間へと進んできました。私と担当者は、テントを少し開き片目で盗み見しながらその瞬間を見守っていましたが、何人かの代表者整列後「通水開始！」の声とともに一斉にボタンが押され、太い電光の流れがゆっくりと久里浜港に向かって移動し始めました。・・・感極まった私の目頭は熱くなり、電光が目の中で白くにじんで広がり周りの光景は消え去っていきました。忘れることのない感動の一瞬でした。

今も、大雨注意報や警報が発令されるたびに思い出される「久里浜雨水バイパス幹線」。広域的な浸水解消に多少なりとも寄与することができ、望まれる人としての大きな仕事ができたとような気がしております。私には、つらく苦しい長い日々だったのかも知れませんが、久里浜地区の住民の方々が大雨災害の不安から開放された笑顔にお会いすることで、仕事の達成感を満たしてくれたのです。

あれから19年の年月が経ち、降雨による水害を受けたという話は一度も耳にしておりません。後に、私は下水道部長、そして全国の一般都市で組織する「下水道研究会議」の代表幹事まで就任させていただくなど、今、思い返してみるとこのバイパス自体は、行政職としての生きる道の分岐点、方向を示してくれた「苦しみと喜びの交差点」であるような思いがします。